



「職人世界に光を」

中小企業経営者の願い

みやぎこうじ
宮崎浩治

●プロフィール

政経倶楽部副代表幹事。

一九五三年 岐阜県高山市片原町に生まれる。五十五歳。

一九八一年 有限会社宮崎工業設立。

一九九九年 株式会社宮崎工業へ組織を変更。

財団法人松下政経塾千葉政経塾一期生。

盛和塾千葉顧問。

NPO「アジアの子供達を支援する会」理事。

現在、宮崎工業の経営を通じて「金を残すは下、業を残すは中、人を残すは上なり」をモットーに奮闘中。

「職人世界に光を」中小企業経営者の願い

今春もわが宮崎工業に、中学を卒業した二名の新規社員を迎え入れることができました。二人のご両親、関係者各位、就職までに協力くださいました多くの方々に心から感謝申し上げます。そして今、私が経営をさせていただいております会社はどのような会社なのか、何を目指しているのかを、この二人の新入社員の話を通じて御説明させていただきます。

若者たちとの面接の現場にみる現代社会のひずみ

彼らとの出会いは入社数カ月以前に遡ります。

希望があれば保護者同伴、または教育者同伴での会社見学、説明会などに対応します。あるいは一人で訪問して来て一人で面接、自分の判断でこの道を選択する子など、いろいろです。

本当に一人ひとり個性豊かな子どもたちです。とはいっても彼らの年齢は概ね十五歳から十七歳。就職を希望、または、しなければならなくなった背景には、現在の教育、社会、生活環境等の根深い問題があります。彼ら自身、そして関係者となる我々全員が、それと直面することになり、その都度、虚しさや、人間としての無力感、激しい憤りを覚えることとなります。

たとえば就職に際して提出される成績表などを見ても、どうしてこんな成績がと思ふような内容のものが、ほとんど毎回提出されてきます。ほとんどの教科の評価は最低基準以下。たまに得意な教科や科目があっても、少々の向上はあるものの、残念ながら平均以下です。

ただし、ここで彼らの名誉のためにあえて申しますが、その評価は彼らの所屬し

た学校の教師や校長らによる評価であり、彼ら自身の真の能力、実力を正確に示すものではないことを、毎日生活を共にしているいろいろな体験をしている身として、はっきりと申し上げておきたいと思います。

一人前の職人を育てるには小学校の九九から再教育が必要

彼らが当社を応募してくる理由は「大工になりたい」「親方になりたい」「親を楽にしてあげたい」「親がいなかったため他の兄弟の面倒を見たい」などさまざまです。

十五歳というそれまでの短い人生経験で、世の中のなんとるかをほとんど知らない子供たちの健気な志は本当にいじらしく（知らないが故の甘さもなければありませんが）、私自身の経験を重ね合わせても、考えさせられてしまうことが一度や二度ではありませんでした。一人ひとりを面接する度に、日本の義務教育の現状、教育制度の無責任さを思わずにはいられません。

これから社会の一員、一人の人間として生活をしていく上で必要な、算数や読み書き、挨拶や嫌いやなどが、ほとんど欠落、いや未習熟のまま社会へ放り出されてしま

うことを、先生方や親はどう思っているのでしょうか。真剣に彼らの将来を見つめてくれているのでしょうか。私には体のいい厄介払い、もつと悪く言えば現代の口減らし、もしくは幼い彼らを自らの生活を守らんが故の道具にしか思っていないのではないかと、モンスターペアレンツたちとの接触を通じて、少々大げさかもしれませんが考えるしまうのです。教育者といわれる方々や保護者といわれる親たちは、我々の建築大工という世界をどのようにお考えなのか理解に苦しみます。

一人前の大工になるためには、それこそ、知力、体力、気力、責任感など、人としての能力は一般社会人よりも優れたものを持つていなければならぬと自負しております。建設現場というものは自然環境や社会環境等で時時刻々変化します。建築には、予算、工程、品質、安全といった条件に適切に対応し、施主の要求に答えなければならぬ、宿命的義務があるからなのです。まして現在はIT社会。たとえ大工といえどもこれからは図面のやり取り、資器材の発注管理、原寸寸法の計算など、専門的知識を活用するにはITの知識は欠くことのできない必要条件になっています。そのためには基礎的な学力が最低限必要不可欠なのです。

入社半年ぐらいを目安に、小学校上級のテキストを利用して、それこそ九九から始めます。漢字の読み書き、足し算、割り算など、本当に一から始めなければならぬときもあります。それでも数カ月経ちますと本人も自信がつき、精神的にも安定してきますので、本格的な訓練を始めることができます。

過去約十年近く毎年中途の社員を採用していますが、途中で去っていく子や保護者の勝手な都合で当社を去らなければならぬ子が出てきます。不本意ながら去っていく子を含めまして、定着率は五割ほどではないでしょうか。俗に情が移るといいますが、可愛がってきた子がある朝退職を申し出てこられたときなどは、私自身の胸に大きな穴があいてしまったような虚しさを禁じえません。

採用時の三つの約束

ともあれ、採用にあたっては面接時、彼らとまず三つの約束をします。

一つめは「挨拶」です。朝のおはようございますから作業終了時の失礼します、おやすみなさいまで、はっきりと大きな声であることを約束してもらいます。

二つめは、全員寮生活になりますので「履物をきちんと全員揃えること」です。一番若い彼らが先輩方の履物をいつも揃えることは、これからの社会の一員となるべき最初の関わり合いを円滑にするための条件と考えたからです。

三つめは、これが一番重要なことなのですが、「どんなに辛くとも三年間は当社を辞めない」ということです。十五歳で当社に入社して、三年間大工の真似ごとを経験した時点で一度私と話し合い、しっかりと進路を決めなおしても決して遅くはないと考えるからです。

体が十分成長していない十五、六歳のときに、毎日朝早くから起きて外の仕事、夏の暑さや冬の寒さを経験し「忍耐」「我慢」「奉仕の心」などをしっかりと身につけ、また仕事の面白さに気付くには、最低三年間は必要と考えます。その間、どんなに苦しくても辞めてほしくないからです。大工仕事の本当の面白さに出会うのも三年間を過ぎたころからと私は思っています。

「三年間やってみて、どうしてもこの仕事合わないと思ったら遠慮せずに相談に来なさい。進みたい別の道が見つかったのなら協力は惜しまない。私が責任を持つ

て力になります」と彼らと約束をします。先日もどうしても音楽関係の道に進みたいといった話があり、残念ながら一人の社員が退社しました。いつの日か成功した彼との再会を楽しみにしています。

裸の付き合い・本音のやり取りを通じて一人前の職人に成長

毎朝、仕事場で彼らと顔を合わせるのが私の楽しみです。

彼らの人生のスタートとすべきこの時期に出会い、裸の付き合い、本音のやり取りを通じて、当社の他の社員、職人さんたちにも大きな良い影響があることは、ここ数年間の職人の安定率からも確信しています。ある職長などは「ここが俺のあがり（死に場所）だ」とさえ言ってくれ、毎日仕事に励んでくれています。自身の息子を使ってほしいと連れてくることもよくあります。現在、当社にはそういった子たちが十名以上おり、これからの当社の将来を担ってくれるものと期待しています。本当にありがたいことと感謝しております。

かつて私は彼らと同じ十代のとき交通事故を起こし、親友の尊い生命を失いました。当時、私は毎日、自身の死のことを考えました。いつ死のうか、死んでしか償いはないと思い、自分の将来などといったものは考えられない状態でした。そんなあるとき、無意識の中に死んだ友が現れ、微笑んで肩をしっかりと抱いてくれたのです。決して夢、まぼろしではないと今でもはつきりと思っております。

しかし生かされた者、生き残った者の意味に気付くまで、その後、数十年の月日を必要としました。亡くなった友人の経験したであろう人生を、その分私が少しでも世の中にお返ししなければ、常に天国から見えてくれる友達に顔向けができませんと考えたのであります。

亡くなった友人の父親の勧めもあり、私は建設関係に進むことにしました。高等専門学校を卒業と同時に、建設会社に就職をしました。現場に配属されいろいろな人々と出会いました。建設現場でのいろいろな職人さんとの出会いが、今の私の仕事に影響をしたことは、当社の現在をご覧いただければご理解いただけると思います。

当時、自分の立場は監督で、身分は保障されていましたが、実際に仕事を進めるのはいろいろな職種の職人さんたちです。実に善良で真面目、責任感旺盛でシャイな素晴らしい方々でした。ところがこの職人さんたちは、社会的な立場はほとんど無視された状態なのです。

建築で働くほとんどの職人さんは「ケガと弁当は自分持ち」で、老後の保障は皆無、病気に至っては国民健康保険のみ、生活が苦しければ支払いができません。治療も受けられず自らの将来に不安を感じながら日々を暮らすしかない、そんな状態でした。現在でも、この状態はほとんど改善されていません。

自己責任と言われればそれまでですが、私はこの時感じた憤りが、生き残った自分のこれからの生き方に何らかの方向性を示すものと確信しました。しかし、どうすればいいのか、どういう解決法があるのか。ずいぶんと悩みましたが、結論は自分で会社を興し、自身で解決するしかないという考えに至りました。

二十六歳で起業して以来三十年、今の会社にしてきました。経営のなんたるかを試すべく、千葉県現在の地に再挑戦したのは、誰も知らないところで、誰にも頼

らずに自分自身の力を試そうと思ったからです。たった一人で一から再スタートしようと考えました。

職人さんの世界に「同じ釜の飯」という言葉があります。どんなに優れていても、どんなに弁舌さわやかでも、同じ釜の飯を食った人間でなければ信用しないということであります。創業十年目にして大工さんの中に飛び込み、一から技術を学びました。教えてくれなければみんなが帰宅した後現場に戻り、現場の収まりを実際に計ったこともあります。大先輩の大工さんの家に行き教えを請うたことも幾たびか。今その大工さんの息子さんが一人前になり当社に協力してくれています。教えを請うた大先輩はすでに亡くなりましたが、多分天国から見えてくださっていることと思います。

新入社員は会社全体、全従業員で見守り育てる

経営者としての教育を受けたことなど一度もないまま、ただ闇雲に真っ直ぐ今日まで走ってきましたが、未熟な経営をなんとかしようといういろいろな勉強会、セミナー

ーなどに出席させていただきました。現代を代表するような素晴らしい経営者の方から幾度となく薫陶をいただきました。その方から「職人さんたちが働きやすい会社をつくれ。職人さんに多くのものを期待して、負担をかけてはいけない」とご指導をいただきました。

以来、経営理念を策定し、経営計画に沿った経営を目指すべく努力しております。社員は人生を当社に賭けてくれているのだから、社長である私が全身全霊経営に打ち込まなければ、社員一人ひとりに申し訳が立たない。経営に全力を傾注しなければ社員は決して動いてはくれない。

世の中には良い社長と悪い社長しかいない、良い社員悪い社員などは絶対にはない。自身の周りで起きるすべての現象の原因は社長一人にある、したがって決して判断を誤ることなく、すべての決定は社長が下し、すべての責任は社長が取らなければならぬ。そう考え、今日までやってまいりました。

冒頭の話に戻りますが、新入社員は会社全体、全従業員で見守り育てていく方向で、社員一同合意しております。決して甘やかすことなく、良いことは良い、悪い

ことは悪いとはつきり伝え、直していきます。

研修生が成長していくということは、他の社員も成長してくれていることだと思います。自分自身を変えていくのは自分だけということに気が付いてくれている人が少なからず増えてきています。同時に「世の中のためになる、少なくともなくてはならない会社を目指そう」「型枠大工の日本一になる」を合言葉に日々頑張っています。

建築業は人々が暮らす憩い空間を創る公器という自覚と誇りを持つて

われわれが施工する建築物は、まだ見ぬわが子わが孫らが暮らす公共空間であり、愛する人々の暮らす憩いの場のはず。「こんな素晴らしい仕事に、誇りと自信を持って、先達から受け継いできた技術に自らの工夫と改善を加え、伝えていく喜びをかみしめ一生懸命に生きていこう」といえるようになりました。

建設業はそんなに魅力のない産業でしょうか。世の中で見ることできるすべての建物は、そのほとんどが、名もなき職人さんたちの手により構築されたものなの

です。名もなきこの素晴らしい職人の一人ひとりに、人としての尊厳と安心の訪れる社会に一步でも近づけるよう、宮崎工業という公器を通じ誠心誠意努力をしていくことを誓います。

〈株式会社宮崎工業 経営理念〉

建設業を通じ社会の進歩、発展に貢献すると共に
全従業員の物心両面における幸せの追求